

KEKIHO

# 鷓朋

第21号



リニューアル

巻頭言 / 定兼 廣行 ..... 1

同窓会誌のリニューアルにあたって / 三宅 成司郎 ..... 2

寄稿

同窓会だより  
 プチ同窓会 / 井上 真一  
 磯部会 / 井畑 里和 ..... 4

特集

気象と海洋環境

「気象と海洋環境」を特集するにあたって / 三宅 成司郎..... 5

気候変動の現状とその影響 / 井上 実 ..... 6

きれいな海・豊かな海 / 島津 充 ..... 8

学内情報



新任のごあいさつ / 黒田 桂菜 ..... 10

平成 25 年学外合宿 in 神戸市立神戸セミナーハウス / 足達 美奈 ..... 11

進水式見学 / 段野 貴士 ..... 12

ブラジル留学体験記 / 幸前 穂 ..... 13



平成 24 年度 海洋システム工学分野 / 海洋システム工学科  
 博士・修士論文ならびに卒業論文のテーマ..... 15

東さんからのご提案  
 事務局より  
 表紙絵紹介 ..... 17

◆表紙絵◆  
 「蘭都彩遊」  
 岡田 博雄  
 (大学 12 期)  
 ◆表紙デザイン◆  
 平岡 良介  
 (大学 49 期)

編集後記



「鷗朋」編集委員 岸 光男(大学 25 期) 竹田 太樹(大学 30 期) 三宅 成司郎(大学 30 期) 野口 利仁(大学 33 期)  
 池田 和外(大学 35 期) 有馬 正和(大学 37 期) 新里 英幸 (大学 44 期) 中谷 直樹(大学 45 期)  
 松山 博志(大学 45 期) 奥村 英晃(大学 46 期)

# 巻頭言



恒例となりました母校の第4回ホームカミングデーが来る11月3日(日・祝日)に開催されます。今年は特別な年回りであり、大阪府立大学創基130年記念となります。母校が大きなそして激しい時代の流れの中で今まで歩んできた道程については、冊子「大阪府立大学130年記念 ― 明日への歩み ―」からうかがい知ることができます。そして又、昨年我々も学科創立70周年を迎え、これを祝賀したところです。このような大きな節目の折に、同窓会の会誌“鴟朋”を一新して皆さまにお届けできるのは幸いであります。

前号までは、本文記事に添付の写真が白黒であったため、誌面全体がやや暗くなり易く、鮮明さに欠ける印象がありましたが、これがカラーに変わることによって誌面から躍動感さえ伝わって来るように思われます。写真は、記事の内容を読み手に先ずイメージとして伝え、記事内容の理解を早め、また深めるのに大変有効な媒体です。これまで執筆するには、提供カラー写真が誌面では白黒写真になるとの制約から、もどかしさや不便をお掛けして来ましたが、これらの問題は解消されますので、カラー写真の利点を活かして、今後とも積極的に寄稿、投稿くださいますようお願いいたします。

“鴟朋”は、会員相互の親睦を促し、また教室と会員の相互に情報を伝え合うニュース・コミュニケーション誌ですので、会員の皆さまに手軽に、何処でも開いていただきたいと思っています。旧版ではこれを考慮して、半折で上着ポケットなどに納まる携帯可能なサイズとされました。新“鴟朋”は旧版より二回りほど大きくなりましたが、これを三つ折りにすると、旧版の半折の大きさとはほぼ同じとなりますので、旧版の携帯性は継承されます。

“鴟朋”は、これまで通り会員皆さまのご意見を頂戴しながら、興味ある、読み易い会誌でありますよう、皆さまと共に歩んでいきたいと思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。

鴟朋会会長 定兼 廣行(大学15期)



中舌鳥門からサイエンス棟を望んだところ

# 同窓会誌のリニューアルにあたって

鴟朋編集委員長 三宅 成司郎 (大学 30 期)

## 鴟朋リニューアルにあたっての経緯

20号にてお知らせしていましたが、同窓会誌『鴟朋』は、ご覧のとおり今号から冊子や文字のサイズを変更致しました。鴟朋21号が、リニューアル版1号です。

文字サイズですが、前号までの9ポイントから10.5ポイントに大きくしましたので、少しは見やすくなったと思います。また、冊子もA4版の大きなサイズにしました。

最も大きく変更したのは、全ページカラー印刷としたことです。その経緯は、以下のとおりです。

お寄せ頂いた原稿を拝見しますと、綺麗なカラーの写真や絵がたくさん使われています。また、編集時にその内容に合った写真やイラストが手元にある場合は、編集委員の独断にて挿入することもあります。それらカラー写真等を白黒印刷してしまうと、筆者が伝えたいであろう臨場感や迫力・細部のリアルさが全く出ず、家に届いた鴟朋を見るにつけ少し悲しく感じておりました。しかし、「鴟朋会の予算のこともあるし、仕方なし!」と、割り切りつつも悶々としていました。そこで、『冊子のサイズを大きくしてページ数を減らすことで、その内容は落とさずに、かつ予算枠内にてカラー印刷ができるのではないかと』と、思いつきました。印刷屋に見積してもらおうと、うまく予算内に収まりそうです。そこで、全ページカラー印刷の方へと舵切りをして、理事会承認を経て今日に至りました。

なお、前号までは小サイズでしたのでポケットに入れて持ち運びができましたが、冊子サイズが大きくなり、その点のご不便をおかけしますがご容赦下さい。

## カラー印刷の効果 —カワセミの観察にて—

カワセミという小鳥を見たことがあるでしょうか? カワセミは漢字で書くと【翡翠】ですが、ブッポウソウ目カワセミ科カワセミ属に分類される小鳥で、雀よりもやや大きめです。川・湖・池等の水辺近くに棲む鮮やかな水色の体色と長くちばしが特徴で、空飛ぶヒスイとか青い宝石、と呼ばれています。晴れた日に川面を飛ぶ姿は、確かに青く輝く宝石のようです。背中青色と胸のオレンジ色の対比が非常に鮮明で、カラーでない、その特徴の“青とオレンジ”を伝えることができません。以下、カラー写真にて説明します。

もうかれこれ4年ぐらい前になるであろうか。近所の川の側道を歩いていると、川面を青い飛翔体がぴゅーっと飛んでいったのを目撃したような気がしました。最初は気のせいだと思ったのですが、2度目の目撃で

『あれはカワセミだ!』。それ以後、デジカメを片手にカワセミを追いかけてみることにしました。

当初は、穴が空くほど川面ばかりを凝視していましたが、なかなかお目にかかれませんでした。ある時、偶然に見た河川護岸の角の部分に、カワセミがちょこんと止まって水面を見下ろしているところに出くわしました。小魚を捕食するためには、水面を見下ろせる場所が絶好なのだということを理解した後は、そこを重点的に探索することで遭遇確率が高くなりました。



カワセミは護岸コーナーや小枝にとまり、小魚を発見するやいなや水中に急降下して魚を捕まえます。水中の昆虫もえさのようです。しぐさは愛くるしいのですが、どう猛な漁師です。高性能のホバリング能力を有していて、ホバリング後に飛び込むこともあります。



カワセミの雌雄の見分けは、下クチバシの違いで行うようで、『雌；下クチバシのみが赤い、雄；上下ともに黒い』が雌雄の判断条件です。



この写真の左側が雌で、右側が雄ですね。

### おもしろ写真にて

その他のカワセミの詳細については、電子辞書のウキペディアに譲るとして、少し面白い(?)と、自分で思う写真を少しばかり紹介致します。

下の写真は、6羽のマガモを撮影したのですが、その中の3羽は白いおしりをこちらに向けています。すなわち、3羽が垂直に逆立ちしている状態を撮影したものです。お互い、交代で逆立ちしていました。カルガモも逆立ちしていましたので、カモ達は逆立ちが得意なのでしょう。この写真では、水面とカモは同系色ですがカラー版ならカモが認識できると思います。



### シンクロナイズドスイミング中のマガモの群れ

我が家ではミニトマトをよく食べますが、あるとき買った袋の中に面白い形をしたミニトマトがありましたので撮影してみました。鼻の頭に汗をかいた眼鏡のおじさんのようです。その後も、何度かこのようなミニトマトにお目にかかりますので、そんなに珍しいものではないのでしょう。カラー印刷なので、トマトの赤色と葉っぱの緑色のコントラストが鮮やかだろうと

思って選びました。



### めがねを掛けた長鼻のおじさん風のミニトマト

最近、コンパクトデジカメを買いました。そのカメラの分類はネオ一眼デジカメと言うそうですが、従来の35mmフィルム換算にて24mm~1,200mmのズームレンズがついています。1,200mmの望遠レンズと言えば、かつてはバズーカ砲のように大きく・長く・重たい超弩級レンズで、かつ手が出ない高価なものでした。また、それは重いため撮影は頑丈な三脚を立てて行わなければなりませんでした。

それに相当する望遠レンズが標準装備されているカメラが、今や4万円ほどで手に入る時代になりました。うれしいやら恐ろしいやらですが、そのデジカメで試しに月を撮影してみました。カメラの重さは約600gですので、当然手持ち撮影です。写真は拡大なし・トリミングしただけのものですが、下側クレーターが鮮明に写っているのにビックリです。漆黒の空間と月表面の白の差が、カラー版でははっきり出ると思います。



最近買ったコンパクトデジカメによる月表面の写真



カワセミ君は、何を探しているんでしょうかねえ？

## プチ同窓会

大学 26 期 井上 真一

F 氏の神戸出張がトリガーになり、昭和 49 年入学組 6 人が、大阪ミナミのミュンヘンに集まりました。6 月 25 日平日の火曜にも拘わらず、ビール片手に学生時代のバカ話や取り留めもない業界情報を肴にして盛り上がりました。

恐らく先生や同期でも写真の顔が誰か分からないと思いますので紹介します。

写真の右から、三輪 (1 講座)、野々口 (3 講座)、田村 (3 講座)、湊田 (2 講座)、村中 (2 講座)、井上 (4 講座) です。

大学 26 期の特徴は何と言っても、卒業時から船・海洋関係者が極めて少なく、所属する業界がバラバラなことです。従って 6 人とは言え、集まること自体が卒業以来という非常に貴重なプチ同窓会でした。



## 磯部会

大学 45 期 井畑 里和



43 期の磯部 (旧姓久保井) さんとの再会をきっかけに、2011 年 11 月に、現役学生を含む 8 名で女子会を開催しました。

以降、発起人の名前を頂き“磯部会”と命名されたこの会は、目的も参加資格も次第に幅が広がり何の会だかよくわからなくなってきましたが、女子を中心にメンバーの快気祝いや婚活など様々な目的のために不定期に開催されております。写真は、昨年 10 月の栗拾い (奈良の岸仙人別宅にて)。

### イラスト・写真の募集のお願い

今号から、カラー版になりました。誌面のスペースにイラストや写真を散りばめて、カラフルなものにしたいと思っています。つきましては、皆様の作品を募集致します。掲載して良いイラストや写真がありましたら、どしどしと賜朋会事務局までお送り下さい。また、併せて表紙絵も募集致します。

(事務局より)



# 「気象と海洋環境」を特集するにあたって

鴟朋編集委員長 三宅 成司郎 (大学 30 期)

## 『酷暑・小雨・激雨、・・・な気候』

2013 年の夏は、本当に暑い夏でした。四国の高知県の四万十市にて、国内観測史上における最高気温 41.0℃を記録しました。それにより、四万十市は「日本で一番暑い都市」として有名になり町は沸いていましたが、そのことを本当に喜んでいて良いのやら？ですね。その頃、また同じ高知県にある早明浦ダムでは小雨・渇水により貯水量が激減したため、水道は減圧して供給を行わねばならない状況になった、とのことでした。お水を大量に使う讃岐うどんのお店では、『蛇口からはちよろちよろしか水が出ないから、商売にならない!』と店主がぼやいているところをテレビのニュースで見ました。

その後、四国を含めて各地で大雨が降ったことにより早明浦ダムの貯水量も復活したようで、それについては一安心ですが、こここのところの気候は【酷暑・小雨・激雨、・・・】というように、渇水になるほどの晴天が続くかと思いきや河川が氾濫し洪水になるほどの大雨に見舞われる、という風に極端に変化しすぎるのではなからうか、と強く感じています。一昔前はアメリカ大陸での専売特許だと思っていた大竜巻が日本の各地で発生し、大きな被害をもたらすようになったのも、気候激変の一例と言えるのだと思います。

## 『荒れる海洋』

一方、海洋に目を向けてみれば、この 6 月にアラビア海を航行中の新鋭コンテナ船がイエメン沖にて荒天に遭遇して船体がど真ん中で真っ二つに切断されるという、あってはならない事故が起きました。その時の波高は、未確認情報ですが 6m とも 7m とも。昔から私が船舶性能に関する研究に用いている波浪統計資料によりますと、この海域において 5m を越えるような激しい荒天状態になるのは全海象のほんの 1%程度にしか過ぎません。そのような従来の波浪データから考えてみますと、この船は極めて稀なる荒天にたまたま遭遇したものと言えます。

でも、よくよく考えてみますと、その波浪統計資料は何十年も前の観測データを基に集計されたものであり、今の海象状況を正確に表現できているかどうかについては不明ですね。昔に比べると、アラビア海に限らず地球上の至る所の海域において、もっともっと頻繁に荒天状況が発生しているのかもわかりません。台風やハリケーンを含み、発生する低気圧は年々その激しさを増しているように感じます。

## 『ところで、海洋の環境は??』

今年の夏に限ったことではありませんが、海象の変化もさることながら海の環境もここ数十年で様変わりしているように思います。世の中の人々の環境問題への関心が高まったおかげで、大都市圏の周辺海域では工場廃水・生活排水を垂れ流していた昔に比べると、その海は一見ずいぶんきれいになったような気がします。しかし、果たしてそのような思い込みは本当なののでしょうか？

色とりどりのカラフルなサンゴが、各所で白化(はっか)という現象によって白くなっているということを耳にしたことがあります。サンゴの表面には藻類が共生しているためにカラフルなのだそうですが、環境条件の変化により藻類がいなくなって珊瑚礁全体が白くなるようです。サンゴは藻類の光合成によって栄養を補給しているので、藻類がいなくなると栄養の補給路が絶たれてしまい、遂には死滅してしまいます。すなわち、白化した珊瑚礁は危機的な状態にあると言えます。また、最近ではしばしばエチゼンクラゲが大量発生します。膨大な数のエチゼンクラゲが漁網を覆いつくし、さらには漁網を破ってしまっている様子などを新聞やテレビで見かけます。これらサンゴの白化現象やエチゼンクラゲの大量発生は、海の環境悪化が一つの原因であろうとされています。我々の知らないところで、地球の環境がジワリジワリと良くない方向に変化しているのでしょう。

## 『では、特集だ!!』

天変地異と言っても過言ではないような今夏のあまりの異常さに、そのようないろいろなことを思いながら鴟朋 21 号の編集を始めましたが、今この地上で起こっている事象について詳しく知りたくなり、それならば! ということで「気象と海洋環境」というタイトルの特集を企画することにしました。そこで、その関係の仕事に従事されているお二方に白羽の矢を立てて、近況報告がてらに、今般の地球事情について解説いただくことをお願い致しました。大変お忙しい中、執筆頂きました井上実様(大学 38 期)と島津充様(大学 58 期)には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

前置きが、非常に長くなりました。では、特集「気象と海洋環境」をお楽しみ下さい。

# 気候変動の現状とその影響

大学 38 期 井上 実

## はじめに

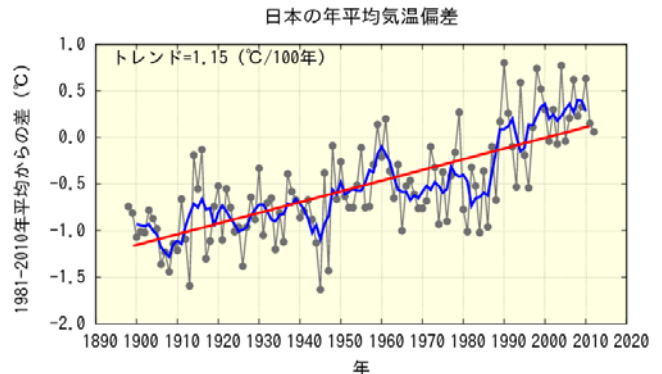
大学 38 期の井上です。私は大学卒業後、日本気象協会に勤めて 18 年目になります。皆さんご存知のように、近年は猛烈な暑さや大雨、竜巻などによる気象災害に関する報道が増えています。このたび、鷗朋の三宅編集委員長より現在の気象状況について解説してもらいたいとのご依頼がありましたので、最新の気象に関する話題をいくつか紹介したいと思います。

まず、はじめに、気象協会と聞いて皆さんはどのような会社を想像されますか？テレビやラジオ、新聞などの天気予報？お天気お姉さん？いえいえ、それだけではありません。気象情報の提供は業務の大きな柱の一つですが、もう一つの柱として、防災や環境に関するコンサルタント業務があります。(最近ではマスコミで気象協会の名前が前面に出ることが無くなったり、ライバル会社の台頭により、新卒の学生さん達の間で天気予報の会社としての知名度もいまひとつです。)例えば、ダム管理のための降雨や河川水位の状況を解析したり、発電所や工場建設に係る環境アセスメント、太陽光・風力発電における日射量・風況予測などを実施しています。また、PM2.5 に代表される大気汚染問題やヒートアイランド現象・地球温暖化といった現象の調査、解析も気象協会の仕事です。

ここでは、環境省からの委託業務として実施した、気候変動の現状と将来の予測および気候変動が及ぼす影響についてとりまとめた結果から、いくつかの話題を紹介します。なお、詳細は環境省のホームページで「日本の気候変動とその影響」(2012 年度版)として公開されていますので、興味を持たれた方はそちらをご覧ください。

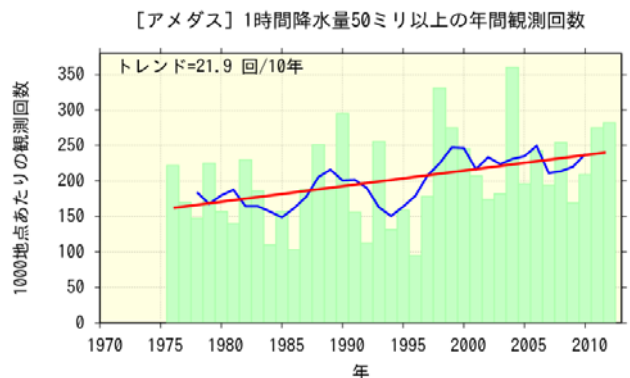
## 気候変動の現状と将来予測

2007 年に公表された気候変動に関する政府間パネル第 4 次評価報告書 (IPCC, AR4) では、世界の平均気温は 1891 年以降 100 年当たり  $0.68^{\circ}\text{C}$  の割合で上昇しており、気候システムの温暖化は疑う余地がないと結論づけられました。日本においても観測結果から平均気温は上昇傾向にあり、100 年当たり  $1.15^{\circ}\text{C}$  の割合で上昇しています。また、日最高気温が  $35^{\circ}\text{C}$  以上の猛暑日や最低気温が  $25^{\circ}\text{C}$  以上の熱帯夜の日数も増加傾向を示しています。降水にも変化が現れており、日降水量 1mm 以上の降水日数は減少傾向にあるものの、日降水量が 100mm 以上の大雨の日数は増加傾向にあります。



日本の年平均気温の変化 (1981~2010 年平均からの偏差)

都市化の影響が比較的に少ないとみられる 17 地点を用いた。黒線は年々偏差、青線は 5 年移動平均、赤線は長期変化傾向。(気象庁)



アメダス地点で 1 時間降水量が 50mm 以上となった年間観測回数の変化 (1,000 地点あたりの観測回数に換算)

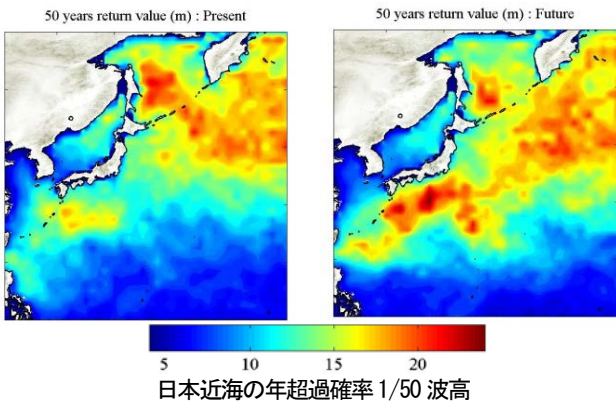
棒グラフは各年の値 (1976~2012 年)、青線は 5 年移動平均、赤線は期間にわたる変化傾向。(気象庁)

将来の気候変化を予測するモデル計算によると、100 年後の日本の平均気温は二酸化炭素の排出シナリオにより幅はあるものの、約  $2.1\sim 4.0^{\circ}\text{C}$  上昇し、その上昇幅は世界平均の  $1.8\sim 3.4^{\circ}\text{C}$  を上回ると予測されています。日本域をより詳細に扱うモデルの計算結果では、北日本ほど気温上昇が大きく、真夏日や熱帯夜の日数は西日本、東日本で大きく増加する一方、日最低気温が  $0^{\circ}\text{C}$  未満の冬日や日最高気温が  $0^{\circ}\text{C}$  未満の真冬日の日数は北日本を中心に減少すると予測されています。また、短時間強雨の頻度がすべての地域で増加する一方、無降水日数もほとんどの地域で増加すると予測されています。その他、中心気圧の低い台風が日本に接近する頻度が増加する、日本近海の海面水温や海面水位が長期的に上昇するとの研究成果があります。



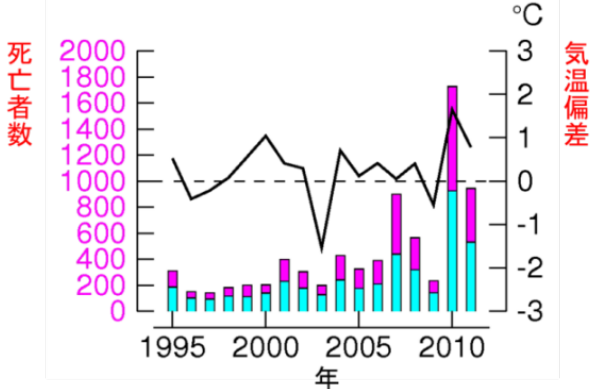
## 気候変動の影響と対策

気候変動の結果、我々の生活にはどのような影響が現れるのでしょうか。無降水日数の増加により渇水リスクが増加する一方で、大雨に伴う災害リスクも増加すると考えられています。全国の1級河川を対象とした研究では、将来洪水が起こる確率は現在の1.8~4.4倍程度になると予測されており、山地における斜面崩壊のリスクも増加する恐れがあります。海上では、台風の強度や進路の変化に伴って、太平洋沿岸地域の高波によるリスクが高まる可能性があります。生態系への影響も小さくなく、野生哺乳類の増加や分布拡大、一部昆虫類の北上などの変化が確認されています。高温化の影響による白米の品質低下やスルメイカの漁獲量の減少も見られ、飲水衛生には大きな問題です。さらに、健康リスクの増加も現れており、1995年以降の熱中症による年間死亡者数の経年的な増加傾向が見られます。



年超過確率 1/50 に相当する日本近海の予測波高(m) (注: 現在気候、右: 将来気候)  
気象研究所全球気候モデル (MRI-AGCM 20km)、SRES A1B シナリオを利用。  
現在気候は 1979-2003 年、将来気候は 2075-2099 年。

森他: 土木学会論文集 B2, Vol. 66, No. 1, 2010



熱中症による年間死亡者数の推移

●: 女性, ●: 男性 (いずれも人口動態統計から)。  
夏季気温 (17 地点の 7, 8 月の平均偏差) を重ねた。  
資料提供: 気象研究所

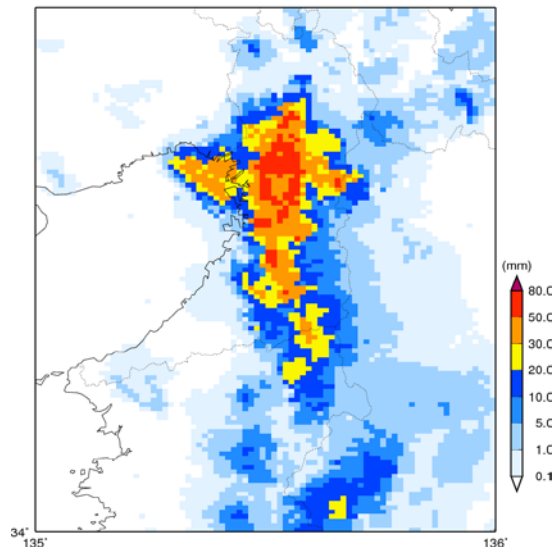
では、このような気候変動の影響に対して、我々にはどのような対策をとればよいのでしょうか。気候変動の影響対策には緩和策と適応策があります。緩和策は根本的な原因である温室効果ガスの排出量を削減することであり、省エネルギー対策や再生可能エネルギーの普及拡大などがあげられます。しかしながら、既に

現れている現象や、緩和策を講じても中長期的に避けられない影響もあります。これらへの対策として、自然・人間システムを調整することで被害を防止・軽減し、あるいはその便益の機会を活用するのが適応策です。例えば、洪水危機管理や農作物の高温障害対策、熱中症予防などがあり、日本政府は関係省庁連携のもと、「適応計画」策定に向けた取組みを始めています。

## おわりに

下の図は気象庁の気象レーダが捕らえた大阪府下の大雨(平成 23 年 8 月 27 日)の様子です。この 3 年間で時間雨量 50mm 以上の激しい雨が 3 回あり、大阪市や堺市内で多くの床上浸水や道路冠水などの被害をもたらしました。適応策の一環として、国や大学などの研究機関は最新の観測手法やより精緻な数値計算モデルの開発を行い、局所的に突然激しい雨が降る、いわゆるゲリラ豪雨の早期探知の研究を進めています。日本気象協会でも国土交通省が配備を進めている最新の気象レーダの結果を利用し、スマートフォンを空にかざすと今いる場所周辺の降雨情報がわかるお天気アプリ、「Go 雨! 探知機 -X バンド MP レーダ-」を無料で提供しています。外出前のお天気の確認や突然の大雨への備えとして、ぜひお試しください。

TIME:2011年08月27日16時00分



気象レーダが捕らえた大阪府下の大雨 (気象庁)

さて、最後に私事ですが、平成 25 年 10 月より京都大学防災研究所へ赴任することになりました。研究室は日本気象協会が設置した寄附講座で、最新の技術から得られた高度で複雑な気象情報を、一般市民の方々や産業界の現場へいかにわかりやすく伝えるかを研究する予定です。これまで以上に府大の先生方のご指導や、各界でご活躍中の皆さまからのご意見を伺う機会が増えるかと思えます。その際には、どうぞよろしくお願い致します。

# きれいな海・豊かな海

大学 58 期 島津 充

## はじめに

大学 58 期生の島津 充です。私が大阪府立大学を卒業し、株式会社 環境総合テクノスに勤めて 1 年半が経ちました。まだまだ一人前には程遠い仕事ぶりではございますが、なんとか懸命に日々の業務に励んでいます。



写真① 会社行事の遠足にて 2013. 4 月

当社は、『環境』・『土木』・『建築』の事業分野からなる総合エンジニアリング企業を謳っています。つまり、建物を建てる際の調査・診断・分析・コンサルティングから計画・設計・施工・メンテナンスに至る全ステップを、建てる前から建てた後まで、当社では一挙に引き受けています。その中であって、私の所属している環境部・水環境グループでは、沿岸海域をはじめとして、湖沼・ダム・河川といった人間活動と関りの強い水域環境の調査を主な業務として行っています。

私もこの会社に入って、大阪湾はもちろんのこと、瀬戸内海、紀伊半島沿岸、日本海、また本州を離れると、四国、沖縄、北海道へと、業務で様々な海に行きました。このたび、鴟朋 21 号への、『業務を通して学んだ海に関するトピックス』での寄稿のご依頼がありましたので、私が業務を通して学んだことをご紹介しますしたいと思います。

## きれいな・きたない、豊か・貧しい

さて、突然ですが皆様は『きれいな海』と聞いて、どのようなものを思い浮かべるでしょうか？

遠浅の海が広がり、吸い込まれそうな水色、白い砂浜とさわやかな潮風、まさしく沖縄のような海を想像された方が大半ではないでしょうか。そんな沖縄の海で調査した折、漁船の船長さん方は口々に「昔に比べると随分汚れてしまった」と物憂げに嘆いていました。



写真② 沖縄での調査風景

一方、夏には赤潮によってコーヒー色の海が広がり、ペットボトル等のゴミが浮遊していて、なんともいえない臭いが漂ってくる『きたない海』の代表格とも言える大阪湾ですが、先日の調査では夏場にも関わらず透明度（海面から白円盤を投げ込み、見えなくなる距離）が 150cm を超え、「今日はやけにきれいだな」と思ったものです。（その前の週では 60cm でした。）



写真③ 大阪湾での調査風景

海の「きれい」、「きたない」とは言うまでもなく主観的、あるいは相対的な言葉です。

臭いや見た目なんかは、天候や流況の些細な変化によって印象が変わってしまいます。それに、大阪湾を見慣れている私にとっては、汚れてしまったらしい沖縄の海も、十分きれいに見えます。大阪湾も「瀕死の海」と例えられた昔と比べるとずいぶんと水質はきれいになったりしますが、それでも「きれいな海」とは言い難いと思います。

また、「きれい」、「きたない」と同じく、海を表現するのに「豊か」、「貧しい」という言葉も存在します。

高度経済成長期に瀬戸内海全体での水質悪化が問題となり、汚染を解消しようと流域の下水道整備などが進められてきましたが、今度は逆に水がきれいになりすぎて、生き物の生育に欠かせない栄養塩が不足して、海藻が育たない、養殖ノリが色落ちする、漁業に影響が出る「貧しい海」になっているという報告<sup>2)</sup>もあります。すなわち、水質のきれいさを追求するだけでは「豊かな海」にはならないようです。

## 豊かな海とは

誰しもが自分の住んでいる街の海が「きたない」・「貧しい」海よりは、「きれい」で「豊か」な海であることを望んでいるかと思います。では、そもそも「豊か」な海とはどのような海を指すのでしょうか。

「豊かな海」を目指すために、それを定義づける議論が各地で行われています。例えば、瀬戸内海では環境省が主体となって環境保全に関する委員会を設立し、瀬戸内海の今後目指すべき将来像<sup>3)</sup>というものが話し合われています。

その話し合いの中で、海の持つ3つの役割について言及されています。一つ目は、海とは人間を含めた海にかかわる生き物の「庭」であること、つまり海は人々の憩いの場であったり、景勝地であったり、他の生物にとっては生息場であることです。二つ目は、海とは「畑」であること、漁業や養殖によって高い生産性が上げられることです。三つ目は、海とは「道」であること、船舶の往来によって人やモノが行き交うスペースであることです。

この3つの多面的価値・機能が最大限に発揮され、美しく、多様な生物が生息できる、賑わいのある海を「豊かな海」として結論付けています。そして瀬戸内海という、日本全国から見れば限られた地域の中でも、たくさんの湾や灘の状況や特性に応じて、それぞれの「豊かな海」が存在するとしています。

この考え方は、瀬戸内海だけではなく日本全国のどここの海にでも当てはまるものではないかと私は思います。

## 豊かな海を目指して

さらに、同委員会では「豊かな海」を創生するための基本的な取り組み事項についても触れられています。

海域・季節ごとのきめ細やかな水質管理を行うこと、負荷量削減と組み合わせた底質環境を改善すること、沿岸域における藻場・干潟等の良好な環境を保全・再生・創出すること、自然景観及び文化的景観を保全すること、以上4つの取り組みがあげられています。

更に、そういった各種取り組みに当たって、その効果について科学的な知見が十分に得られていない場合には、とにかく科学的に裏付けられるデータを蓄積す

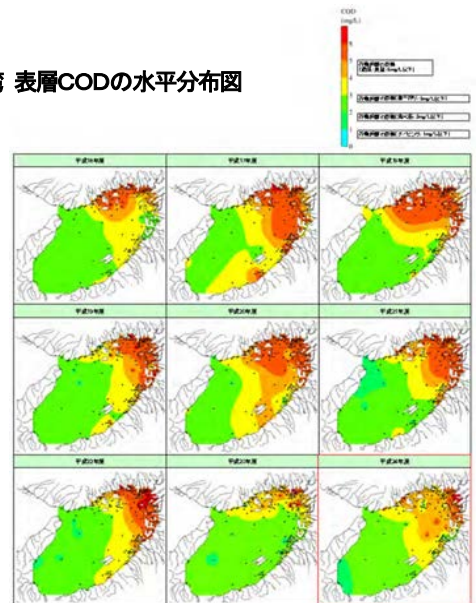
ることが必要であるとされています。

そのような中、私はこの会社において、まさしくそういった業務に取り組んでいます。だからこそ、漫然と業務をこなすのではなく、有効かつ高精度なデータの取得に尽力することを心掛けるようになりました。

## おわりに

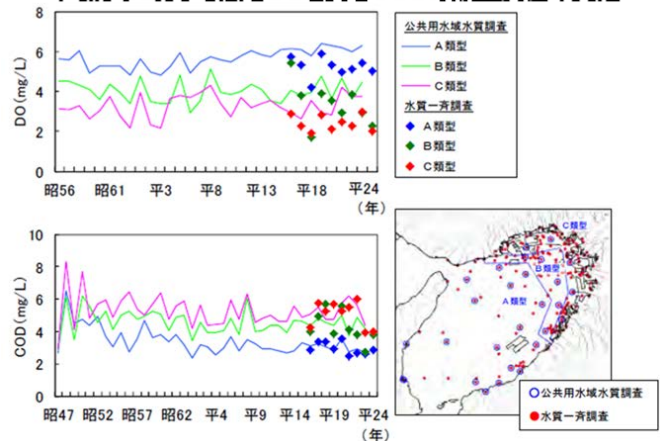
海を調べる・海に係わる全ての人々の努力によって、日本中に「きれいで豊かな海」が広がっていくことだろうと思います。私もそんな一助になればと思い、今後も業務を頑張っていきたいと思います。

大阪湾 表層CODの水平分布図



赤い海域のCOD濃度が高く、汚染が進んでいる。9つの図は年度別の表層COD濃度の変化を示すもので、右下の平成24年度の大阪湾奥の表層COD濃度は、右上の平成18年よりも低い。

大阪湾における底層DOと表層CODの類型別経年変化



この図は、各年における6～8月の底層DO・表層CODの平均値を環境基準の類型別にまとめたものである。この図により、夏季の平均的な水質の経年変化を把握できる。

出展:平成24年度夏季大阪湾再生水質一斉調査の結果について

参考文献:

大阪湾再生推進会議 2013

- 1) 海域環境再生(里海創生)社会システムの構築 最終報告書, 2013
- 2) 中央環境審議会 瀬戸内海部会 企画専門委員会 (第1回), 2011
- 3) 瀬戸内海の今後目指すべき将来像と環境保全・再生の在り方について(最終報告書), 2012

# 新任のごあいさつ



大学 51 期 黒田 桂菜

2013年4月1日に工学研究科海洋システム工学分野の助教に着任いたしました、黒田桂菜（くろだかな）と申します。この場をお借りし、簡単ではございますが自己紹介をさせていただきます。私は1981年に府大のある堺に生まれました。幼少の頃から過ごしたのは堺より南の、自然に囲まれた河内長野ですが、学生時代、そして今こうして教員として府大にお世話になっているということは、堺との縁がよっぽど深いのでしょうか。小学生の頃は、家の裏にあった林の中で探検ごっこをしたり、家で本を読んだりと色んなことに興味を持って遊び回っていました。毛利衛さんの宇宙からのテレビ中継に感激して、果てしない宇宙に憧れを抱くようになり、お小遣いで望遠鏡を買って月や星を眺めたりもしていました。

1999年に海洋システム工学科に入学しました。いつか、宇宙のことを勉強したいと思っていたので、海洋システム工学科への入学は、残念ながら第一希望ではありませんでした。とはいうものの、バスケットボールで汗を流し、旅行やアルバイトなどをして楽しく学生時代を過ごしていました。2、3回生の頃だったと思いますが、飲み会の席で中谷直樹先生から海洋調査船みらいの話聞き、赤道直下で1カ月の間船上で過ごす、そのスケールの大きさに自分もいつか乗船してみたいという思いが強くなり、奥野武俊先生の研究室に入りました。修士1年目の時にみらいに乗船し、毎日海に囲まれた生活をする中で、海や空、私たちを囲む自然に対して畏敬の念を抱くようになりました。みらいへの乗船が海洋システム工学科での学びをより深いものにしてくれました。

その後、念願のハワイ大学への留学を果たしましたが、その時に留学への背中を押してくれた奥野先生にとっても感謝しています。ハワイ大学では、大塚耕司先生の親友である Dr. Masutani のもとで、メタンハイドレートの研究に励みました。英語もろくに通じない、不慣れな研究環境の中で、与えられた環境で最大限の

努力をすること、そして最後までできると信じて何とか形にすること、それが次に繋がるということ、身をもって学びました。帰国後も、先生方の研究分野ではないメタンハイドレートの研究を続けさせて頂き、奥野先生、中谷先生のご指導のもと、現在に繋がる研究姿勢が身についたと思います。

研究の面白さを感じてはいたものの、社会人として早く働きたいとの思いから、鉄鋼メーカーに就職しました。二年目に、宮城県に転勤となり、在職した4年間のうちのほとんどを宮城で過ごすことになりました。ここでは、産業用バルブの技術開発を担当し、学生時代に学んだシステムの的に物事を捉えるという発想が非常に役に立ちました。休日には、東北を車で駆け回り、温泉三昧の日々を過ごしました。大阪にはない雄大な土地、関西人とはまた少し違った、東北人の温かさを肌で感じ、東北で過ごした時間は、私の人生にとっての宝物です。

さて、仕事は充実していたはず・・・でしたが、忘れかけていた（眠っていた？）研究への思いが湧き上がり、4年間勤めた会社を退職し、博士後期課程に入学しました。入学後は、研究だけでなく、異分野の学生とイベントを企画したり、海外の学生と共に環境教育プログラムに参加したりと、視野を大きく広げることができました。大塚先生、中谷先生のご指導のもと、2013年3月に学位を取得し、現在に至ります。私の担当は、大学院では海洋システム工学分野、学部（今は学域と呼びますが）では現代システム科学域という2012年に新設された学域です。そのため、海洋システムの学部生と授業で関わる機会は少ないのですが、一教員として、学生に学問の面白さを伝え、共に学問を切り開いていけるように、精一杯取組む所存です。まだまだ若輩者ではございますが、ご指導・ご鞭撻の程、よろしく願いいたします。

# 平成 25 年学外合宿

In 神戸市立神戸セミナーハウス

学域 2 回生 足達 美奈

4 月 20・21 日に学外合宿が行われ、神戸市立神戸セミナーハウスに海洋システム工学科に所属する 1 回生から大学院生、先生方の大人数で訪れました。

私達 2 回生は、海洋システム工学科に正式に配属されてからの初めての行事でした。2 回生同士でもまだ顔と名前が一致していない中での行事だったので、初めはとてもドキドキしていました。ですが、宿泊施設に着いてすぐに行われたドッジボール大会では、先生方も試合に参加されていたことから海洋の仲の良さ・縦のつながりの良さを感じました。しかし、途中から雨が降り出したためドッジボールができなくなり室内での〇×ゲーム大会に変更になってしまい、とても残念でした。



ドッジボールで活躍する 2 回生



卒業生の講演会

夕方からは卒業生の三菱重工業の竹田さん、日本郵船の福永さんの講演会がありました。実際に卒業された先輩方の、卒業後の仕事のお話を聞く良い機会を得ました。

夕食後、セミナー室で懇親会が行われ、まず新しく配属された私たち 2 回生の自己紹介がありました。海洋での自己紹介は普通ではありません。必ず何か面白いことを言わないといけませんでした。初め 2 回生は緊張していましたが、自己紹介の時に先輩たちがいろいろと声をかけてくださったおかげで緊張が解けていきました。そのあとは、多くの先輩方や先生方と様々な話をしました。話



夕食時



研究室紹介

すことはたくさんあり、セミナー室の利用時間が終わった後も、宿泊棟で朝まで話していました。普段の大学生活では聞くことのできない貴重な話をたくさん聞く事が出来ました。

朝食では、夜にはしゃぎすぎたせいか人数が少なかったように感じました。朝食後部屋の掃除を行った後に、セミナー室で研究室紹介が行われました。実際に研究室の話を知ると、私が知らない事ばかりでした。

とても早く時間が過ぎた 2 日間でした。普段話すことのできない先輩・先生方とお話することができ、様々な話が聞け、とても良い経験になりました。また 2 回生の仲も深まった合宿でした。とても楽しかったです。

企画してくださった先輩・先生方、そしてすべての準備をしてくださった M1 の先輩方、本当にありがとうございました。



2 回生の集合写真

# 進水式見学

海洋システム工学科4回生 段野 貴士

2013年8月7日(水)、川崎重工業神戸工場(第4船台)にて、58000トンばら積運搬船の進水式が行われました。大阪府立大学海洋システム工学科からは4回生3名、1回生3名が見学に行きました。私たちが到着した時には、すでに多くの方が会場に詰めかけており、式典開始の30分前には見学できる場所が限られているほどでした。私は海事関係の方だけでなく、一般の方がたくさん来られていることに驚きを感じました。それと同時に、船舶系の学科に所属する一学生として、一般のみなさんがこのように船舶に対して関心を持って下さっていることに嬉しさを感じました。

やはり58000トンのばら積運搬船を目の前にすると非常に迫力がありました。このように船を間近で見る機会というのは、この4年間で何度も設けていただいています。毎度のこと船のスケールの大きさに感動を覚えます。

午前11時、式典が開始し、ご挨拶と進水の準備が同時に進行していきました。小さな子供からお年寄りまで、船が動く瞬間を今か今かと期待している様子でした。近くで船を見たいという気持ちを抑えられない子供が危険区域まで入ってしまうという場面もありました。



午前11時15分、轟音と共にばら積船が動き出しました。ゆっくりと動き始めたばら積船は、徐々にスピードを上げ、大海原へと旅立っていきました。その瞬間大きな拍手が巻き起こり、会場は大きな感動に包まれました。この船に長い年月をかけ、多くの人が携わり、この日を迎えているのだと思うと感慨深い気持ちになりました。世界ではたくさんの船がモノを運んで、



私たちの生活を支えています。しかし、大学の勉強だけではイマイチそのような実感が湧かないのが正直なところです。今回の進水式見学をはじめ、“自分の目で見る”機会を多く与えてくれるのがこの学科の特徴だと思います。自分の目で見ることで、船を身近な存在にすることが出来ます。

私はこのようなイベントに参加したおかげで、知識以外にも得たものがたくさんありましたし、この学科に誇りをもつようになりました。これからも海洋システム工学科にこのような素晴らしい伝統が残ることを祈っています。

最後にこのような貴重な機会を与えていただいた川崎重工業株式様に深く感謝いたします。ありがとうございました。



# ブラジル留学体験記

博士前期過程 2 年 幸前 穂

日本から飛行機で約 30 時間。時差-12 時間。まさに地球の裏側の国であるブラジルに大学の夏休みを利用して、約二ヶ月間の留学に行ってきました。ブラジルに留学？と思われる方が多いかと思いますが、私はこの二ヶ月間でブラジルの人々、ブラジルの大学、そしてブラジルの文化に触れ、BRICS と呼ばれる今世界で注目を集める発展途上国の一角であるブラジルという国を直に体感し、これまでの自分の見識を大きく広げる経験をしてきました。

ブラジルと言えば、Rio de Janeiro のカーニバル、サンバの国という情熱的なイメージがある一方で、実際のところは治安が悪そうな得体の知れない国と思っておられる方も多いのではないのでしょうか？最近のニュースでは、翌年に控えたサッカーの FIFA ワールドカップや 2016 年開催予定の Rio de Janeiro オリンピックの影響により物価が高騰し、デモが連日行われていると報じられています。私が二ヶ月間暮らしていた Sao Paulo 州 Campinas 市 Barao Geraldo という地域では、デモこそなかったものの、確かに治安に関してはあまりよくない噂を何度か耳にしました。しかし、Campinas はブラジルの中で最も生活レベルの高い都市圏という評価を受けているだけあって、街に住む住民の生活水準は非常に高いという印象を受けました。

私がブラジルで通っていた UNICAMP (University of Campinas) という大学はブラジルで 2 番目、南米でも 3 番目に名を上げる総合大学です。そして私が二ヶ月間を過ごした研究室では、主に洋上での石油開発に使用されるライザー管の VIV (Vortex Induced Vibration) 現象についての研究が行われており、教授の Celso Kazuyuki Morooka 先生は VIV 研究の第一人者として活躍

されています。ブラジルでは海底に豊富な石油資源が眠っているため、その海底石油を開発するための浮体式海洋構造物の研究が大変盛んに行われているのです。私はそこで学部生時代からの研究テーマである浮体式洋上風力発電に関する研究をしていました。OrcaFlex という浮体構造物の係留システムの運動解析や疲労解析が可能な計算ソフトと、私が Fortran で作成した浮体の運動解析プログラムをカップリングし、浮体式洋上風力発電の全体システムの運動解析プログラムを完成させるというのが私のブラジルでのミッションでした。ブラジルではまだ再生可能エネルギーがあまり浸透していないということもあり、研究室ではみんなが私の研究に興味を持ってくれ、大変協力的にサポートをしてくれました。しかし英語で研究に関するコミュニケーションを取ることはとても難しく、相手の言っていることが分かったとしても自分の英語力の低さのために思いを伝えられないことがしばしばあり、歯がゆい思いを何度もしました。それでも何度も何度もお互いが理解し合うまで話し合いを繰り返すことができた結果、私がブラジルを立つ当日ギリギリに何とかカップリングを完成させることができました。

私がブラジルで過ごした二ヶ月という時間は、まさに“光陰矢の如し”という言葉の通り一瞬そのものでした。初めは言語も文化も国のことも全てが未知の土地での生活に不安もありましたが、そこに住む人々の暖かさに救われ、最初から最後まで本当に充実した時間を過ごすことができました。平日も研究室から家に帰ればハウスメートとほぼ毎日のようにバーに行き、休日になれば先生や研究室の友人が街のダウンタウンを案内してくれたり、先生の家で Churrasco というブラジル式の BBQ(バーベキュー)をしたり、ハウスメ

ートと買い物に出かけたり旅行に出かけたりと、研究の合間を縫って毎日のようにとても楽しいイベントがあり、めまぐるしく時間が過ぎてゆきました。

二ヶ月間という非常に短い期間ではありましたが、ブラジルという土地で生活し、現地の文化に触れながら研究をできたことはとても幸せなことであり何事にも代え難い経験となりました。そして、今 BRICS として大きく発展を続けるブラジルの一流大学で学ぶ学生の意識の高さ、志の高さは見習うべきところであると感じました。みんなが自分の専門を身につけるために大学で学び、社会で活躍するために必要な技能を自ら認識して勉強している姿にはとても感銘を受けました。ブラジルで見たこと、聞いたこと、感じたこと、経験したことの全てを自分のこれからの修士

論文の研究に留まらず、来年から社会人として働くための、さらにはこれからの人生の糧として生かしていきたいと思います。

最後に、私がブラジル留学を決めたきっかけは昨年ブラジルの Rio de Janeiro で開催された OMAE(Ocean, Offshore & Arctic Engineering) という海洋開発関連の国際学会に参加したことでした。そこで Celso Kazuyuki Morooka 先生を紹介して頂き、UNICAMP への留学を直接交渉して実現したものです。私の留学を快く受け入れて下さり、さらには留学期間中さまざまなお心配りをして下さった Morooka 先生には心より感謝しております。本当にありがとうございました。

またいつか、必ずブラジルへ帰ります！



今回の学内情報のうちの3つの原稿は、学生の体験記でした。

学域制では、入学後1年間の勉強を経て海洋システム工学科への正式配属が決まりますが、学域2回生の足達さんはまさにそのように配属が決まったところで、先輩達との交流を深め、社会人の大先輩の講話を聞くことができる合宿に参加されました。

4回生の段野さんは既に船会社に就職が決まっており、卒業研究を成し遂げた暁には船の建造発注・運航管理を行う側になりますが、造船技術者にとっては船舶建造の晴れの舞台とも言える進水式に立ち会えて、造る側の心意気に触れることができたのではないのでしょうか。

修士2年の幸前さんは、今年が3年間の研究成果をまとめる集大成の1年です。そのうちの2ヶ月間、研究精度を一段高めるべくブラジルの大学に留学し、現地の学生諸氏と切磋琢磨・苦ししながらの研究遂行や余暇を楽しんだ様子がよくわかりました。

学生達のこれらの経験は、今後の人生に大いに役立つものと思います。



## 博士・修士論文ならびに卒業論文のテーマ



### 博士論文(博士後期課程)

(指導教員)

- |                        |   |
|------------------------|---|
| 黒田 桂菜 (大塚)             | エクセルギーを用いた物質循環システムの評価法に関する研究  |
| Somayeh Daneshvar (大塚) | Evaluation of Various New Technologies for Valuable Materials Production from Green Macro Algae |
| Hosseini               | (緑藻類からの有用物質生産に関する複数新技術の評価)  |

### 博士論文(博士前期課程)

(指導教員)

- |                  |   |
|------------------|---|
| 岩本 拓也 (柴原・伊藤)    | 耐熱ステンレス鋼溶接時における HAZ 部粒界液化割れの FEM 解析手法の確立    |
| 内海 聖恵 (大塚・中谷)    | 閉鎖性海域における硫酸化細菌の動態に関する研究                     |
| 大森 達也 (大塚・石井・中谷) | 過栄養海域の水質浄化を目的とした海藻培養プラントの基本設計               |
| 岡田 崇志 (柴原・伊藤)    | ウォータージェットピーニングにおける応力緩和挙動の FEM 解析            |
| 奥井 良輔 (馬場)       | 放射状に広がる重力流に及ぼす回転の影響に関する研究                   |
| 菅田 航平 (池田・二瓶)    | LNG FPSO に係船されたシャトルタンカーの規則波中及び風波中における平面運動特性 |
| 鈴木 一鷹 (池田・二瓶)    | 運動計測装置と波浪観測装置を用いた操船支援システムの構築                |
| 塚原 洋平 (中谷)       | 海底近傍における物質動態モデルの構築に関する研究                    |
| 寺嶋 一二 (山崎・新井・中谷) | 統計的最適制御を用いた海底熱水鉱床採鉱機の走行制御                   |
| 橋本 翼 (片山)        | 滑走艇の不安定性評価のための自由航走試験システムの開発                 |
| 堀井 龍 (馬場)        | 密度の不連続面の計算法に関する研究                           |
| 八木 利起 (柴原・伊藤)    | 溶接変形・残留応力解析における効率的モデル化に関する検討                |

### 卒業論文

(指導教員)

- |                  |  |
|------------------|--|
| 梅田 隼 (片山)        | Pod 推進器船および船外機艇の推力・舵力解析モデルの開発                      |
| 小谷 匠 (片山)        | 遺伝的アルゴリズムを用いた船外機付き小型滑走艇の船外機取り付け状態最適化に関する研究         |
| 片島 朗 (深沢・桃木)     | 数値計算手法を用いたタンク内変動圧の推定方法に関する研究                       |
| 喜井翔太郎 (有馬)       | 自律型表情モニタリングシステム KII の研究開発                          |
| 小菅 雄紀 (有馬)       | 海棲哺乳類の音響観測とその解析                                    |
| 今 智史 (柴原・伊藤)     | 仮付けを考慮した溶接変形解析                                     |
| 近田 拓也 (深沢・桃木)    | 波浪変動圧の位相差を考慮した応力応答関数の簡易推定法に関する研究                   |
| 柴田 浩希 (池田・三宅・井畑) | 超幅広コンテナ船の開発に関する研究                                  |
| 中元 悠介 (山崎)       | 沖縄トラフにおける海底熱水鉱床の開発モデルの提案                           |
| 古尾 篤史 (池田・二瓶)    | 船底空気循環槽による摩擦抵抗低減法の研究                               |
| 本庄 卓也 (坪郷)       | 洋上二重反転風車の性能評価と浮体運動に関する基礎的研究                        |
| 松尾 真志 (池田・二瓶)    | 幅広船型による RORO 船の省エネ化に関する研究                          |
| 三ノ浦 駿 (中谷)       | 画像計測を用いた藻場の広域モニタリングのための距離補正手法の検討                   |
| 森田 哲 (馬場)        | 重力流の先端速度に及ぼす壁面摩擦の影響                                |
| 山本 雄太 (山崎・新井・中谷) | 比重差を用いた海底一次鉱手法の開発                                  |
| 横山 沙織 (柴原・伊藤)    | 理想化陽解法 FEM を用いたスポット溶接の3次元連成シミュレーション                |
| 芳山 達彦 (坪郷)       | 波浪中の筒状膜構造タンクに関する基礎的研究                              |
| 谷口 竜也 (有馬)       | ソーラー充放電システムの開発                                     |
| 中砂 彰範 (山崎・新井・中谷) | パーティクルフィルターを用いた統計モデルによるバクテリアマットの生物量推定に関する基礎的研究     |
| 向井 馨一 (深沢・桃木)    | 不規則波中でのコンテナ船の船体縦曲げモーメントの統計的性質と弾性振動を考慮した構造設計法に関する研究 |
| 山下 紘央 (新井)       | 海水のインピーダンス特性を用いた溶存物質濃度計測手法の検討                      |

## 各賞受賞者

塚原 洋平君	海洋システム工学分野最優秀論文賞	日本船舶海洋工学会奨学褒賞
岩本 拓也君	海洋システム工学分野優秀論文賞	
横山 沙織さん	白鷺賞	海洋システム工学分野優秀論文賞
梅田 隼 君	海洋システム工学分野最優秀論文賞	日本船舶海洋工学会奨学褒賞
向井 馨一君	海洋システム工学分野優秀論文賞	

## 平成24年度 卒業生就職先一覧

### 大学院後期課程修了

黒田 桂菜 大阪府立大学教員  
Somayeh Daneshvar  
Hosseini

### 大学院前期課程修了

岩本 拓也 新日鉄エンジニアリング(株)  
内海 聖恵 東レ(株)  
大森 達也 Hitz日立造船(株)  
岡田 崇志 川崎重工業(株)  
奥井 良輔 コマツ建機販売(株)  
菅田 航平 デット ノルスケ ベリタス  
鈴木 一鷹 (財)日本海事協会  
塚原 洋平 大阪府立大学博士後期課程  
寺嶋 一二 トヨタ自動車(株)  
橋本 翼 スズキ(株)  
堀井 龍 国土交通省  
八木 利起 トヨタ自動車(株)

### 学部卒業

梅田 隼 大阪府立大学博士前期課程  
小谷 匠 (株)ソーシャルリクルーティング  
片島 朗 大阪府立大学博士前期課程

### 学部卒業

喜井 翔太郎 (株)KCM  
小菅 雄紀 大阪府立大学博士前期課程  
今 智史 大阪府立大学博士前期課程  
近田 拓也 新明和工業(株)  
柴田 浩希 大阪府立大学博士前期課程  
中元 悠介 高槻市役所  
古尾 篤史 大阪府立大学博士前期課程  
本庄 卓也 大阪府立大学博士前期課程  
松尾 真志 大阪府立大学博士前期課程  
三ノ浦 駿 (株)ニチゾウテック  
森田 哲 大阪府立大学博士前期課程  
山本 雄太 大阪府立大学博士前期課程  
横山 沙織 (財)日本海事協会  
芳山 達彦 大阪府立大学博士前期課程  
谷口 竜也 (財)日本海事協会  
中砂 彰範 アクセンチュア(株)  
中元 慎吾 (株)西島製作所  
平田 就啓 オムロン(株)  
三澤 佑輔 (株)九電工  
向井 馨一 上宮高校 教員  
山下 紘央 大阪府立大学博士前期課程

## 連絡先不明者一覧

“賜朋20号”発行後、会員録記載データの変更や訂正のご連絡を多数いただきました。皆様方のご協力に厚く感謝申し上げます。以下に2011年11月以降、連絡先が不明になった方々についてお知らせいたします。連絡先をご存じの方はお知らせ下さい。(敬称略)

造船3期 吉田 文二	大学37期 井上 一也	大学48期 高橋 努	大学57期 河井 宏道
造船4期 大喜多 敏明	大学37期 和田 哲	大学49期 吉田 俊介	大学57期 南 雄介
大学18期 増田 建蔵	大学42期 松村 茂	大学52期 北島 勝太	大学57期 片山 卓也
大学18期 米田 千瑳夫	大学43期 和田 明	大学52期 神山 哲也	大学58期 酒井 健嗣
大学20期 神代 博志	大学44期 平野 一樹	大学53期 大道 典子	大学58期 清水 祥子
大学22期 小坂 彰	大学45期 藤田 伸泰	大学54期 池田 麻由	大学61期 小谷 匠
大学23期 旗手 光清	大学45期 金(橋本) 帝憲	大学54期 剣特 良章	大学61期 平田 就啓
大学26期 堀田 勉	大学45期 奥倉 英明	大学54期 澤田 高侑	
大学27期 吉田 誠治	大学46期 宮地 誠之	大学55期 河村 恵里	
大学32期 石井 博之	大学46期 吉田 剣児	大学56期 村上 尚隆	
大学34期 酒向 泰弘	大学48期 中野 徹	大学56期 望月 健司	

## 東様からのご提案

鷗朋編集委員長 三宅成司郎 (大学 30 期)

大塚耕司先生 (大学 35 期) を通じて、造船 4 期の東成光様から貴重なご意見・提案を頂きました。東様は、大阪府立大学の前身の大阪工業専門学校に入学された大先輩です。鷗朋 20 号掲載の岩佐先生・菱田先生の写真を見て頂けたようで、当時のことを思い出すとともに、鷗朋に対する以下のご提案を頂戴致しました。

『大阪工業専門学校が新製の府立大学へと移行した大学設立当時の苦労談やその当時の様子などを記録として残しておいては如何でしょうか?』

府立浪速大学が設置された昭和 24 年はまさに戦後の真っ只中であり、その困難さ・ご苦労は戦後生まれの多くの同窓生にとっては想像もつかないものです。

このような歴史的な事実は、埋没・散逸する前に記録にしっかり残して然るべきと考えます。そのために、当時を知る先生方や同窓生の方々にお話を伺えるような機会を設けたいと思っています。

今回、このような貴重な提案を頂きました東様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

### 事務局より

●11月3日(日)10:00~16:00

第4回ホームカミングデーが開催されます。  
是非、中百舌鳥キャンパスにお立ち寄りください!

●原稿募集!!

「テーマ」は自由です。近況報告、同級生との同窓会開催顛末、地元の紹介、技術的なレポートなど、自由なテーマでお書きください。分量については、柔軟に対応いたします。

●会費納入のお願い

平成 25 年度分の会費 (2,000 円) をまだお送りいただいていない方は、同封の振込用紙にてお振込みいただきますようお願い申し上げます。なにとぞご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



### 鷗朋 21 号の表紙絵:「蘭都彩遊」



#### 作品に対する岡田先生の談話

この絵は、ハーグのマウリッツハイス美術館がある公園の池に建物(国会議事堂等)が水面に映える写真を参考にして、アクリル絵の具でスケッチ水彩風に仕上げたものです。

定年後に始めた趣味ですが、最近は、アクリル絵の具で油絵風に描くことが多くなっています。今後も、気楽に色々の画風を試してみようと思っています。

### 訃報

造船 4 期 木下 博 氏 (平成 25 年 6 月 5 日)

大学 1 期 坂口 陽一氏 (平成 25 年 4 月 6 日)

大学 10 期 磯川 彬 氏 (平成 25 年 5 月 4 日)

本会はこの訃報に接し、謹んで哀悼の意を表します。

## 編集後記

夏休みに伊勢神宮の内宮と外宮を訪れました。今年は伊勢神宮の式年遷宮の年でもあり、多くの人が参拝していました。酷暑の昼間でもうす暗く、竹林の、冷え冷えとした中にそびえる古来の神殿。その雰囲気には何かのエネルギーを感じました。 (新里)

9月に開催された、第34回アメリカズカップ。まず見てびっくり、そう、カタマランなのです。ご存知の方も多いかと思いますが、前回からだそうです。その時代のニーズでレギュレーションは変わるのでしょうが、見る人にとっても、乗る人にとってもカタマランが魅力ある形なのか、皆さんどうお感じでしょうか。 (H.M)

大阪市立大学との統合を検討する新大学構想会議で、地球未来理工学部という新学部の名称案が挙がっている。海洋研究開発機構 (JAMSTEC) の研究調査船「ちきゅう」と「みらい」の名前に因んだという噂もあるが、真相はわからない。 (☺)

最近話題のLCCを使ってみました。超格安航空料金にするための、コストカットの工夫が随所に見られ、「なるほど」と思うことが多かったのですが、先ほどまでチェックイン業務をしていたお姉さんが、飛行場で航空機の誘導をたどたどしく行っていたことにはさすがに驚いた! (N.N)

鷗朋会ニュース「鷗朋」第21号

2013年10月31日

発行：鷗朋会 (けきほうかい)

〒599-8531 堺市中区学園町1-1

大阪府立大学大学院工学研究科

海洋システム工学分野気付

TEL/FAX 072-254-7461

Email: doso@marine.osakafu-u.ac.jp

<http://www.marine.osakafu-u.ac.jp/~web01/ob/index.html>

郵便振替口座番号 00970-7-126500

りそな銀行深井支店 普通口座番号 0060109

加入者名「鷗朋会」

印刷：(株)春日

